

文のしおり

関西大学所蔵

『清少納言記校異』について

関西大学図書館 手紙を読む会

本フォーラムに加納諸平の消息文を紹介してきたが、その際参照した山本嘉将著『加納諸平の研究』中の未確認資料の一つに眼を奪われた。それは諸平の『枕草紙校異』である。何故ならば、関西大学図書館岩崎美隆文庫にある『清少納言記校異』(以下『校異』という)がそれと何等かの関係があるように思えたからである。以前にも紹介したように『枕草紙校異』はほぼ完成と推定し得る著述であるが現存未詳ということを嘉将氏は述べている。

諸平が枕草子に関する著作を進めていたことは天保十三年飯田秀雄に宛てた書簡によって、初めて明らかにされたようだが、同年鷲見安喜に宛てた書簡により、さらに具体的内容と進行程度を窺い知ることができる。

枕草紙数本校正。先年骨折候后、風土記選述にて打捨、此節ふととり出し候。

春曙抄をむねとし、かの玉のをぐしの類に春曙抄丁付にて異本校正、並に愚考、諸家の考をも書たしかかけ、百丁斗出来候也。

今少し残り居候間、近日やりつけ可申しそしみ居候也。中古の書、淫行などの事どもかいつけ、只つらのにくき女に御座候へども、文体をかしく故実なども有之て、すてがたきものに候。源氏とならび立候様奉存候¹⁾。

今回紹介する『校異』の序文を見ると、この書簡と符合する部分が多い。即ち、嘉将氏も言つように諸平が枕草子の注釈に志したのは比較的早い時

機であり、枕草紙に惹きつけられ、大変深い関心を抱いたであろう様子などは随所に見える。それ故、途中統風土記の選者として十年ほど活躍していたが、岩崎美隆の『枕草子私記』あるいは『杠園抄』に刺激されたのであろうか、再び枕草子の注釈に心を入れたことが述べられている。従って『校異』と現存未詳の『枕草子校異』とは天保十四年の完成本に近いものかどうか、また全部ではなく一部分かは別として、同一のものということには間違いないと考えても差し支えないであろう。

『枕草紙』に関する研究書は豊富であるが、この『校異』は枕草紙の研究者にとつては見逃せない新資料の一つとして参考になるのではと推察するので、ここに翻刻し、紹介することとしたい。

一書誌

書 型 二六・四×一七・五糎

丁 数 九八丁 墨付一九丁 本文は黒墨、注は青墨、朱書書入あり

表紙及び用紙 表紙 紺色布目地 用紙 薄様紙

内 題 清少納言記校異

印 記 「関西大学図書館蔵書」二種、「岩崎美隆文庫」

請求記号 D12911.204/12/2 31 登録番号 一五〇八八六

この『校異』は序文から察するに、天保十三年もしくは十四年に諸平が著述したものを岩崎美隆が手写したもので、欄外に美隆の注が加えられている。嘉将氏に依れば、鈴屋翁の『玉の小櫛』の様に認めたのは、天保十三年で、その後天保十四年には「体裁を『春曙抄』の如くに改め、本文を先に諸註を検討し自説を述ぶ²⁾。」とある。少なくとも天保十三年以後に著したものであることは読み取れる。ただ、天保十三年の草稿を写したものであれば百丁ほどの紙数がなければならぬ筈であるが、それほど多くない。天保十四年ならば、多分丁数は増えているのではと思われる。だとすれば、

これは各論にあたる本文の部分が全く欠落して、諸平の見解など総論的な部分のみが収められていると考えてよいのではなからうか。さらに『校異』の「誤字」の項の最後をみると、「前略、今もひとつふたつおもひよりにたるか中に、決て誤とするき八たゝちに改めつ。そ八●印を付たり」とあるが、●印を付したものは見当たらないことから酌み取ることができよう。

『枕草子』は古典文学作品の中でも最も異本間の異同が甚だしいもの一つとしてあげられており、それは単に本文の異同だけではなく、雑纂と類纂のように構成までも相異なる諸本が伝わると言われている。池田亀鑑氏は「伝能因本系統本」「三巻本系統本」「前田家本」「堺本系統本」の四種に分けている。この『校異』の最後に記す異本目録は「堺本系統本」の章段である。「異本」の項に「後光厳院宸翰本」のことが認められているが、そもそも、諸平に枕草子研究を促したのは、彼自身が殿村常久や村田春門等に依頼して異本を集めることに没頭したことは勿論だが、とりわけ春門から譲られた「以後光厳院宸翰之本写之」とある堺本系統の本文の入手がきっかけであると嘉将氏は言う。残念なことは本文部分がないことである。

我々の身近な『枕草子』は原型がどのようなものであつたか、全く分からないため、現在ある諸本のうち、どれが最も原型に近いのか研究者により種々の考察がつかがえるのは当然であろう。原型は後年何らかの事情によつて解体され、それぞれ別途の方法によつて再編集され、現存の四系統の諸本となつて伝わつたものではないかと、さらにその証明が今後に残された問題であるとの意見も見受けられる。

『校異』の内容は「書名」「作れる時代」「作意」「よみみんひとのころかまえ」「文体」「諸本のさた」「異本」「古写本」「誤写」「註書」「異本目録」から成る。

最初の「書名」であるが、これもどうして付けられたのか、どのような意味合いを持つのか、必ずしも分かっていると言われている。しかも、

これらの書名も作者が付けたものではなく、後の人が命名したものであろうと、実にさまざまな推量により意味づけられているが、現在に至るも定説を見ないのが実情であるかに解釈されている。諸平は多くの文献には、どのような名称で呼ばれているかを紐解き、豊富な自説を加えている。

作品の成立年代、執筆時期を知るには、枕草子の記事自体が最も良い資料となるが、諸系統本、跋の有無、各本による微妙な違いなど、複雑な要素が絡み合い一概には定めがたいと言われている。「作れる時代」の項に「此記、はやくよりおもひたちて書きおけるを、その後宮仕の後に書き加へもし、略きもしつるか…」とあるが、清少納言と中宮定子との出合いが何時かなど諸々の要因に係つて、確定に至ることは難しいのであろう。事程左様に研究の余地はまだまだ複雑に多岐にわたつていいる。この『校異』にはさまざまの示唆があろうと確信する。

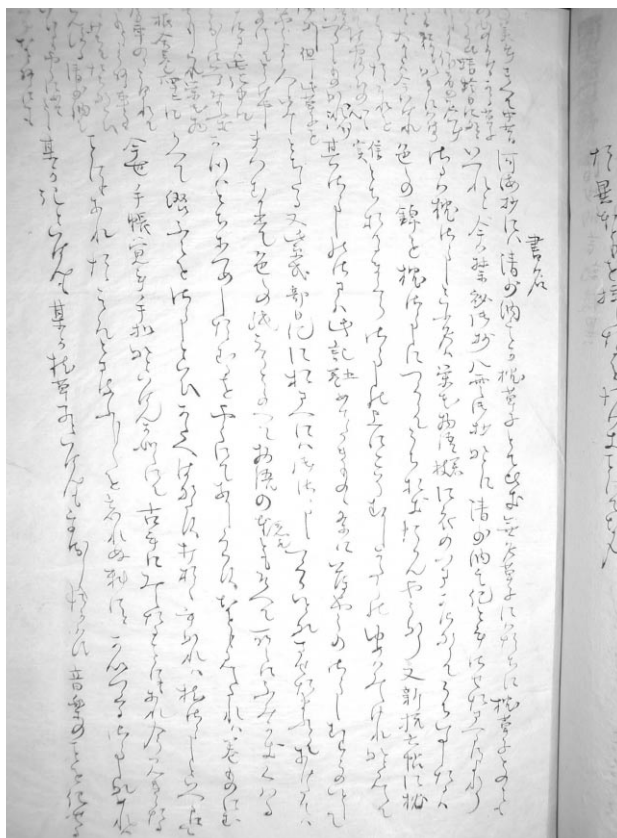
なお、美隆の注は主として書名に係わる枕詞について、多くの文献を紹介しながら考察しており、興味深い意見と言えよう。

なお、関西大学図書館 手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。

森川 彰（助言者）、池尻孝子、大國克子、大塚千歳、田中純子、
長谷草子、布川香織、福井智佳子、八尾奈緒美

注

- (1) 『加納諸平の研究』 山本嘉将著 初音書房 昭和三六 一三三―一三四頁
(2) 前掲(1)二八八頁 「加納諸平年表」天保一四の諸平に関する事項欄



『清少納言記校異』部分

二 翻 刻

翻刻については、次の要領に従った。

- 漢字は、原則として常用漢字に改めた。ただし、例外として中(艸)、哥(歌)、无(無)は使用した。
- 仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- 踊り字はそのままにした。
- 本文中の小文字は原文の通りとした。
- 濁点は原文の通りとした。
- 本文には句読点を施した。
- 本文及び頭注は、字数、行数とも追い込みとした。
- 紙面の都合上、頭注は本文の後にまとめた。ただし頭注のはじめの位置を示すため、本文の右横に*1~*4を付した。
- は判読不能を示す。

清少納言記校異

清少納言の枕草子八、紫式部の源氏物語にをさく立おくれす、其名世にきこえたれと、註釈八延宝板の抄と北村法印の春曙抄と一時軒惟仲の旁註との外に八、よにきこえず。異本八、近世群書類従に載たるの三にて、見るひとさへすくなし。今八二十年の昔、是等の本とも、はた素本、活字板、又一本入江昌喜かもたりし異本などをも得て、春曙抄にすかりて諸本みなから校しける。をりく一二おもひよれる説ともあれ八、註さくめくもの著さ八やおもひしを、程もなく我國の続風土記の撰者の列にかすまへられて、十年かほと八ひたふるに其方の便となりぬへき書ともをあさりて過にしか八、枕八たちりのミたかくつもりにたるを、去年の夏、河内国の荒木美穂といふ人とひ来て、それが師とたのめる岩崎美隆はた年頃此草子に心よせて、何くれと例証なども引いてたる書ありと語りしか八、いとくゆかしくおほえて校本とう出で、みする序におのかおもひよれる説をも、ひとつふたつかりしを、月日経て、美隆よりせうそこして考説とも所々つみとりて見せにおこせつ。けにふかくこゝるとめてみるらんほとしるくいとをかき説ともおほく、それが中に八はやくおのかおもひよれると同じ考もあれ八、昔のことくたり書してかへりやり、今少しのこれるおのか説をかきいて、よしあしされためさせ八やおもひなりて、つもれる塵うちばらふを例とひ来るひとく打みるまゝに、おなじく八くもてのことく書みたれる校本を、とみにみえやすかるへく書とへのへて、かのひとつの説をかきそへな八、いと便よからましといひしを、けにとつへなひしかと、そ八十日二十日のほとに八、かきあへぬへくもおほえな八、猶春曙抄の本文のあしからん所々を鈴屋翁の玉の小櫛のさまにかきとりてと、ふてとりそめて、大かたかきをへたるを、此比とり出で見るに、なほいとわつらはしく、人々もいふに、さらにおもひかへしてかく八ものしつ。されと昔かきそへおきたる説ともの、かたなりなる引書などのおる

そかなる。はた爪しるしのミして何ことにかと今八うちかたふかるゝなともあり。本文をさへわすれかちになりて、解かたきふしゝいとおほけれ八、うる八しくかきとゝのへんこと八、おもひたえたれと、今より後にも例証とも八かきもそふへけれ八、たゝ異本ともを校したるをたけきことにてなん。

書名

河海抄1に八、清少納言が枕草子とてひき、無名草子に八たゝちに枕草子とのミもいへれと、今八禁秘御抄、八雲御抄などに清少納言記と書させたまへるによれり。さる八枕さうしといふ名八栄花物語校者に衣のつま、かさなりてうちいたしたる八色々の錦を枕さうしにつくりてうちおきたらんやうなり。又新撰六帖に枕美信とちおけるまくらさうしの上2にこそむかしかたりのゆめ八みえけれなど見えて其さうしのさま八此記巻五めてたきものゝ条に、薄やうのさうし、むらこのいととしてとちたる。又紫式部日記におまへに八御さうしつくりいとなませたまふとてあけたて八、まつむかひて色々の紙えりとゝのへて、物語の本糸すともそへて所々にふみかきく八るかつ八とちあつめ、したゝむるをやうにてあかしくらすなとも見えたれ八、巻ものにむかへて綴三ふミをさうしといひ、かたへはなたす打おく書なれ八、枕さうしといへるにて今世手帳覚書手扣4なといはんか如くにて、古書にみえたることにもあれ、今見きゝたることにもあれ、たゝこゝるとまるふしゝを忘れぬ料にと、かいつくるさうしなめれ八、某か記といはんも某か枕草子といはんもうるゝたか八す。音楽のことを記せるものに弘法大師の枕草子といふかあるよしをもきゝつれ八、なほなにかしくれかしの枕草子といへる書とも、おほかりつらめと、此草子のめてたきにけおされて枕草子といへ八必此記のことしなれるなるへけれ八、たゝちにしかいはんも作者の為おもたゝしきかたに八あれと、其はしめをおもへ八、猶某か枕草子といふへく、さて八書名いと長けれ八記とししたまへるによれるなりけり。すへてかゝる冊子とも八標題もなく、巻の次第なとも書せるものに八あらず。たゝみし人、うつしとれるひととのこゝろゝにて、某か記とも某

か草子とも表紙にかけるものにて、和泉式部物語、紫式部日記なともみなおなし。たゝかゝるはかなたちたる書のミならず、禁秘御抄と建曆御記禁中抄、禁秘抄など申奉れとも、もと八標題なとも書させたまへるに八あらさるへく、家々の記録もおなし。又素本、活字板の標題に八清少納言とのミ書し、契沖阿闍梨もしか引用2られたり。それはた、あしからねとも、名のミにて八混らはし。又抄2に枕草子といふ意八枕八哥枕の意なり。され八此草子の体、初に少しいひいたして、其心を次第に奥へいひもて行故に哥の枕詞にひとしきなりとて、かの諺の段ならぬ筆すさひをさへ、強てその諺の意もて解たる八、いふにも足らず。春曙抄に八此草子にことゝなるもの、めてたきものなと枕詞をかきてさてそれゝとかきつらねられたれ八、枕草子といへるにや。但此草子の奥書によれ八、枕にこそ八しはへらめとて申うけたるものにかゝれたる草子なれ八、枕草子と申はへるなるへしと二説をのせたり。初説の枕詞八顯昭法橋の古今序註に教長卿説とて、枕詞八常語也とみえ、物語書にまくらことゝいへるも、おなしく平常の言種なれ八扱なきに八あらねと、そ八おのつからうちあひたるさまにこそきこゆれ。何かしくれかしの枕さうしといふもの、皆かゝる類に八あらさるへけれ八、なほ栄花物語、新撰六帖の明証によるへし。後の説八契沖阿闍梨か説に枕中子といふ名八、やかて中子の奥に自書せるかことし。顯昭之後、誰か是を枕にせざらんといへり。これ八枕八つねにもてなすものなれ八、枕にもする八かりもてあそふ心也。と見えたるに似たる趣にていひもてゆけ八、栄花、新撰六帖の歌文の意にちかし。

作れる時代

寛和二年一条天皇ミト宝算七にて御世しろしめして、東三条入道兼家が専ら政マツリこちたまひ、正暦元年辞したまひしか八、其子中関白道隆公かハリたまふ。此時天皇十一にならせたまへ八、摂政八むねと此公そことゝりて八ものしたまへる。其年の二月公のオホヒメキミ一女君十六にて入内したまひ、十月五日中宮にたちたまへるを、諱定子と申せり。清少納言八此宮の女房也。宮仕

のはしめ八いつ比にありけん。中宮の兄内大臣伊周公大納言ときこえしほとなれ八、同じ三四年はかりにやあらん。中宮の御母高一位君前侍清原元輔が女にかゝるさかしめ有とき、給て、中宮に八めし上させ給へるなるへし。記の中にとしたけたることゝもこれかれ見えたれ八、三十余にてや仕そめけん。さて此記はやくよりおもひたちて書おけるを宮仕の後にもかき加へもし、略きもしつるか経房朝臣にとられしともいへる本なるへし。

そ八長徳元年の頃にや隆家卿中納言なりし時扇の戯言をいへる条に、かやうのことこそかた八らいたきものゝうちに八入つへけれ。ひとことなあとしたまひそとはへれ八、いかゝはせんと見え、或本の奥書に左中将また伊勢守ときこえし時、里におはしたりしに、はしの方なりける豊さし出しもの八物の意此中子のりて出にけり。まとひとりいれしかと、やかてもておはしていとひさしくありてそかへりたりし。それよりありきそめたる也とそと見えたる。左中将八経房朝臣なるへく伊勢なりし八長徳元年のことなれ八、其頃すてにかゝる名目ともをあつめてかきつゝりたる中子ありしなるへし。そ八かの異本にやありけん、又今つたはらぬ本にやありけん、詳ならず。異本の条合考へしさて後長徳元年道隆公薨したまひて、伊周公父君にか八りて政こちたまはんとし給しかどことならて御堂関白道長公なん、政八とらせたまひしも、同二年伊周公罪ありて筑紫になかされたまへる頃、清少納言も道長公のかたに心よせありといふやうの言やありけん。暫八宮仕もせず里にこもりしかと、ほともなくめしかへさせたまへり。さて後道長公の勢ならふ人なくなりたまひしかバ、長保二年二月廿五日姫君十二にならせたまへるを内に奉りて中宮としたまへり。後上東門院と申し、諱八彰子と申せり。同日定子中宮を八改て皇后宮と申せり。此時天皇御年廿一、皇后榮花物語による扶桑略記に八十五とあり廿六略記に八十五とありなせたまへり。これより八内より出たまひて、さまざまなけきたまひつゝ、十二月十六日に崩たまへり。さて後少納言八皇后より給八れる冊子を御かたみにて盛におはしましゝ、こしかたのことゝもおもひつゝけつゝ、今の彰子中宮の御方の並ひなく花やきたまへることなとをもものしとおもふ。まけしたましひもそひて、皇后の厚き恵をはしめ

てなにくれとかきく八へしこそ普通の中子に八有けれ。そ八いつ八かりなりけん。皇后の崩たまへる後、其妹君淑景舎小姫君と申すにつかへしほとのことによ、長保五年新造の内裡のことみゆれ八、それより後なる事うへなし。無名中子に清少納言八一条院の位の御時、宇治の関白中関白道世をしらせたまひけるはしめ、皇太后宮宮中御事の時あらせたまふ盛にさふらひ給ひて、人より優なるものとおほしめされたりけるほとのことゝも八、枕草子といふものにみつからあらはして侍れ八、こまかに申におよ八す。哥よみのかたこそ八の意八の意八の意元輔が女にてさ八かりなりけるほとよりは勝れさりけるとかやとおほゆる後拾遺などにもすくなく入て侍めり。みつからもおもひしりてさやうのことに八ましりはへらさりけるにや。さらて八いといみしかりけるものにこそあれ。其枕草子こそゝるのほと見えて、いとをかしう侍れ。さ八かりをかしようもあ八れにもいみしくもめてたくもある事とも、のこらすかきしるしたる中に宮のめてたく盛に時めかせたまひしことはかりを身のけもたつばかりかきいて、関白殿うせたまひ、うちのおとゝ内大臣流されたまひなとせしほとのおとろへを八かけてもいひいてぬほとといみしきこゝる八せなりけん。人のほかゝしきよすかなともなかりけるにや。めのと子なるものに具してはるかなるゐ中にまかりてすみけるに、青菜といふもの干に外トにいつとて、昔のなほしすかたこそわすれねとひとりこちけるを見侍れ八、あやしのきぬきてつゝりといふものほうし今昔にしてはへりけるこそいとあ八れなれ。まことにいかむかしこひしかりけん、なといへ八云々とみえたるもよくいひつゝけたり。又傍註に載たる伝来本の奥書に、上略これが書たる清少納言八あまりゆうにて、なみくなる人のまことしくおたのミしつへきほとを八かたら八す。えんになまめきたることをのミおもひてすきにけり。宮にも御世おとろへにける後に八つねにもさふら八す。さるほとにうせたまふけれ八、それをうき事におもひてまことにまたことさまに身をおもひこともなくてすくしけるにさるへくしたしたのむへき人も、やうゝうせはてゝ子なともすへてもたさりけるまゝに、せんかたもなく、としおいにけれ八、さまかへて、めのとこ

のゆかりありて阿波のくに、行てあやしきかや屋にすみける。つゝりといふものをほうしにてあをなといふものほしに外にいてゝかへるとて、むかしはなほすかたこそおもひいてられたれ、といひけんこそ、猶古き心のこりけるにやとあ八れにおほゆる。され八人のを八りのおもふやうなる事、わかくていみじきにもよらさりけるとこそおほゆれ。とみえたるもおなし趣也。但し此文によれ八阿波国にてみまかれるなるへし。今彼国にもしかいひつたへたりこそ猶老の後おとろへたるさまを古事談に著して自ら千里馬翁とさへいへるあやしきことも見えたれと慥なる伝なし。

作意

嵯峨天皇の御世の頃にや有けん。竹取物語といふもの出来はしめしより男女の中らひの色々しきかたにて、誠に世にありし事もさらぬあとなしことも好ましき心より八あ八れともをかしも見るへく其世のさまにあ八せてつくりなせるものかたり、年月にそひていとおほくなれりとおほしくて此記^書物語八といふ条にあまた載たる。其外、更科日記、河海抄等にもさらぬ書ともにもみえたるものかたりの今の世につたはれる八十が一なるへく、それもおほく八女のこゝろやうにかけるものとおほしくて無名中子に紫式部か源氏をつくり、清少納言か枕中子を書きあつめたるよりさきに申つる物語とも、おほく八女のしれさるはへらすやと見え、今世につた八れるも女につくれるかおほかるにてしるへし。かれ八当時才ある女八ものかたりかきつくるをたけきことゝし、よの中たゝめゝしき方にのミうつれるにあ八せて男女のわきなくもてはやして好^心のしるへともせしさまなるそいとあさましき。さるを清少納言の生質八庚申の夜哥よまさりし条に^五御前にてものかたりなとする序にもすへて人に八一におも八れず八更に何にか八せん。たゝいミしうにくまれあしうせられてあらん。二三にて八死ぬともあらし。一にてせあらんなといへ八、一乗の法なりと人々わらふとみえたるを始にて、たゝ我八かほにおもひあかりてほこりかに我ほめのミしつゝ女しきさま八をさゝみえす。ともすれ八さかしたちて四納言とて世にゆ

るされたるひととすらいとみあひて、はてゝ八口あかすへくもあらす。いひけちたる事ともこの紀にをりゝみえたるをあちはひてしるへくはた郭公とつくひすとのさためにしひて郭公にこゝろよせ、雨夜にかよふより八月夜にかよふひとをあ八れといひ、宇津保物語の涼仲忠のあらそひに仲忠に心よせ雪山のもくすをはるかにいへるなど、すへて人に似じといとむこゝろつねにやまされ八、上にいへるものかたりふミかゝん事も竹取よりこなたうるさきまで世にあるあとをふまなかちをしく、さりとおのか力のほともミせまほしくことかゝるのやうなることゝもを書つらねたるなるへし。さる八すさまじきものゝためしに十二月の月夜を引書神楽の早哥などにもをみなこの才八しもつき、しはすのかいこもちなといふ類古より常になへていへることゝもゝおほかりけめと、かく段々をたてゝ書せる草子八古よりきこえね八、かの人に似しとおもひ第一とおも八れんことをつねにねかふ心より書つゝれるなるへし。或説にからくにの宋の世人李義山か雑纂といふ書にもつきたるよしいへれと、彼書一条天皇の御世のほとにわたりこしものとおほえす。はたかれ八いといやしききたなけにむつかしきことのおほくてこれににるへくもあらす。もしかの書によれるならんに八、彼かひなひたる事多きとこれかミやひたることおほきとらうへにて皇国と彼国とのてぶりのたかへるほともみえてをかしけれと、たゝその体の似たるなるへし。

よみみひとのこゝろかまへ

此記古言故事の明証となるへきこと八さらにもいはず、きぬの色目器物なとのことゝもかりそめに書せるもうるハしく、書とゝのへたるより八中々にそのさまよくしらるゝもあり。儀式たつことのかたはしなとも、古記録とも考へ合せらるゝ事もあり、それか中に此記の外に八ものにみえさることゝものつたはれるなど八いとゝめてたし。まして当時の人情八あさましきまでしられて色々しきつくりものかたりめきたることみゆれと、又今によにもかかはらぬ事とも多しまたわかちいへる段々の中に八ひとのを

しへともなるへくさらてもこゝろえおきたらんに八益ある事すくなからすなむ。

文体

作者のなへての女房たちに異なるのみにあらず、文体もまた異にしてくたくしく書つゝへきを勢するといひはなちたれ八、其あやこそ源氏物語に八およ八さらめ、文勢八まさりたりと見ゆる所々おほかり。清敵茶話抄に枕中子八何の左法もなくかきたるもの也。三書ありつれくさ八枕草子抄をつきてかきたるもの也とみえたる八、今本が異本か又別本か詳ならねともけに兼好法師も此記になら八れけんほと八しく、今も随筆さらてもひとくたりのものかゝんに八便あるかきふりにてよくまねひ得たらん書八論文とかゝんにも法とすへき事おほからんかし。

諸本のさた

普通本板にえれるもの五種あり。一に八素本奥に慶安二曆初夏上旬と京のふミ屋かかきつたり。二に八活字本奥書みえねとも、やゝ古く板にえれるなるへし。三に八抄奥に延宝二年五月と書肆か板に彫たるときを書せり。数多の古本ともあつめて校したるよし序にみゆ。世に十五卷抄といへり。四に八春曙抄奥に延宝二年七月十七日北村季吟書と見えて法印の自筆なり。五に八旁註奥に天明元年十一月上幹一時軒惟仲の自序あり。本文五巻細川玄旨法印より伝来にて奥書に枕草子八人ことに持たれとも誠によき本八ありかたきものなり。これもさまで八なければとも、能因か本とききはむけに八あらしとおもひて、かきうつしてさふらふるも、さうしからも手からもわろけれ八、これ八いたくひとなにかさて、おかれさふらふへし。なへておほかるなかになのめなれと、猶此本もいと心よくもおほえさふら八す。前の一条の院の一品のみやの本とて見しこそめてたかりしかと本にみえたり云々とあり。以上五本のうち素本いとわろく活字板もうゑたかへたる所いとおほけれど、古写本をつつしたるなめれ八さすかによきこともあり。

いはゆる十五卷抄の本文に八いとよきことおほく又異本とて頭書にのせたる中にもよきことあり。旁註の文八させるふしなし。春曙抄もこれかれの本とも校し合せられたるなめれと脱文いとおほく誤字も少からね八、今八四本の正しくみゆるをとりて校しつ。誤とみゆる八省き、いつれにてもありぬへき八猶校しおきしかともれたるもあるへし。此外に八清水浜臣か校本に伴翁か一言二言かきくはへられし本を、十年ばかりをちつかた写させしか中に五本にもれたる文にてよき八校しつ。又さいつ頃元禄年中の写本を見しかともおほかた板にえれる素本などのさまにて誤おほけれ八とらず。さてこれらの本ともをりく次第のたかへるところくもあれともすへて八後光厳院天皇の宸翰本のことく八たか八す。もと同本なりしを人々うつしつたへたるか互に写しひかめもかし。宸翰本をいさゝかつ校したるもあり。はやく綴目のみたれたるなともあるへし。今八春曙抄の本文の次第によりてたかへるところく其よしをいへり。今是等の本ともを宸翰本にむかへてすへて普通本とす。

異本

清少納言異本とかりに標題を書せる一冊の本あり。春は曙といふよりすへて何八といふかきりをのせ、次にめてたきものといふより何ものといふかきりをのせ末に正月の一日八といふより心とまれることくも数ヶ条を載たれと自他の名をあらはしてさたせるふてささひ八一条ものせず。奥書に這本後光厳院宸翰不違二字書写功了とありて普通本と八次第などもたかひていとく異なり。やゝ古き写本を入江昌喜か一わたり校したる蔵本を得て其後群書類從四十七九にのせたるを見るに全く同本也。奥に右清少納言枕冊子原為一冊、標題無之半面十一行書也、今分上下加題目且文章之中雖有可疑者、以謂後光厳院宸翰不違一字書写不敢改之、以仮字違亦偏任本畢としるせり。昌喜本八十二行なれ八模写に八あらさるへし。はた類従本に八をりく傍に漢字をそへたり。此二書もいさゝかつ互に写しひかめたるもある八よき方にしたかへり。春曙抄に又一本上堺本とて宮内

御清原氏の奥書あり。発端より一紙かほと八よのつねの本におほかた似て其次枕詞の次第など大に異也云々とみえたる堺本、やかに宸翰本と同本なるへけれといまたみあたらす。抑此異本のさま八普通本の次第もなくかきみたれる何八何物などの名目を類聚してかけるさまにてまたく普通本の抜萃ともいふへく見ゆるものから、普通と同意にて文章いと異にておほかたくはしきかたにて詞つゝきもすくれてみえ、又同段にて普通とおなじ名所ともをしるし前後に載たるなど、もとより異なる本とおほしくなぬ。かゝれ八かの左中将経房朝臣のもておはしけん本なりしにやともかく八おほゆる也。さら八普通本八其後わざと次第をみたりてわすれかたきふしゝをもかきそへたるにやあらん。しか八あれとはしめ次第なく書ミたれるをのちに類聚せん八大方のならひなれ八決て八いひかたし。故に今普通本の次第にしたかひて本文につゆたか八ぬ文八、を加へたかへる八其傍に一字さけて異とかきつけて其たかへる文をのせたり。但し纒に一字二文字のたかひなと八本文の左に を書いて異本になき詞八 无と書せり。又異本の次第のまゝに書出たる目録をも下に載たり。

別本

河海抄に十のすさまじきものを載たるか普通本にも異本にもなきかあり。はた其文二巻同段に引出たるかことく漢字もてかきたるもいとめつらし。たゝし漢字にかける八引用る人のすさひにてもあるへけれと其文の今つたはる本ともみえされ八かりに別本と名つく。此別本かの源経房朝臣のもておはしゝ草子にてもあるへけれと他に考あ八すへきよしなし。

古写本

殿村常久か千草の根さしに八重山吹といふをのせて、輪池翁（寛政）のもたる古写本にありといへり。此本にまたみす。

誤写

古書とも八誤字とおほしきも、妄にあらためかたきものにていとおもひの外なる事ともおほけれ八諸本を校へて正さんにしくことなし。されと諸本ともはやくより誤字、脱字、衍字などもあれ八、ひたふるに誤字の考を捨んも亦頑なり。古人の真蹟もそをすきうつしにしたるも、草仮字八いとゝよみとりかたきものにて形の似たる字八互にあやまれるもうへなることゝこそおも八るれ。此記の頃にて八佐理卿、行成卿などの書、これかれとつた八れるを見てもおもひあ八すへし。まして此草子に八決て誤とおほしきことおほく見え、はた世にめつらかなる詞とおほゆるも誤字なるかありけなり。たとへ八風八といふ段に九卷三月八かりのゆふくれにゆるく吹たる花風とある八春風のはるをはなと誤りて花といふ文字にさへ書るにて其春風八一本にあま風とあるをおもふにもと百風とありし百を八るとあやまれるなるへく又一本にあさ風とある八まをさとあやまれる也。さるを花風の花八花くもりなどの花なるへくおもひてもし自らものせん哥文などに用ひな八わるかるへし。又なかたかわら八をいかておこす人といふ文八仲忠か童おいいひおとす人といふ誤なめるを中高童といふ名目とおも八ん八いとつたなし。一二字或八五六字の誤もいとおほかるへく今にして八考かたきもあまたあるへし。されと又誤字おほしとおもふこゝろをさきたてゝあやしき詞とも八た⁴やすく改なんもまたいとわるかるへけれ八よく考へてこそさたすへけれ。今もひとつたつおもひよりたるか中に決て誤としるき八たゝちに改つ。そ八 印を付たり。

註書

春曙抄に季経の抄十冊ありと聞つたへはへれともいまた見すといへり。おのれもとし頃あさりもとめつれと名たに遣したる人もなし。かれ八かの十五巻抄そ今ある注解の始に八ありける其作者の名を書さゝる八いとくちをし。此註頭書に例証とをのせていとくはしきさまなから解あやまれる事いとゝおほし。旁註八むねと此抄と春曙抄とによりて書せるか中にとり用ゐるへきこと一二あり。ひとり春曙抄なんいとすくれて八見えたる。さ

る八奥書にも季吟法印の多年寢食を忘れてかきくはへられたるものなれ八
けにその其功もしるくなん。然八あれと誤おほかる本文によられたれ八、
いとおもひの外なるかたに解なされたるふしくもすくなからず。故に今
此書にときひかめられたること、はた例証のたらざりしことくもを補ひて
彼註とひきあ八せて見んたよりとす。まことや十五卷抄旁註ともはやくよ
り板焼て本もすくなけれ八此二書にみえたることをも、とるへきかきり八
引そへつ。

一巻

異本ニナキニハ ノ印ヲサス 〔異とあるは補平七しくは美
隆の追記か不詳―翻刻者注〕

四季のさだ 頃八 元日のいはひ 白馬八日のよろこひ かゆ
杖 除目 三月三日とりむし 祭のころ ことはことなるもの
于定国 袖の上おそひ 猫のかうふり うつしの香 よろこひ奏
す 枝扇 山八 峯八 原八 市八 淵八
海八 渡八 陵八 家八 出雲のうら

二巻

すさまじきもの たゆまるゝもの 人にあなつらるゝもの
にくきもの 心ときめきするもの 過にしかた恋しきもの
こゝろゆくもの ひらうけ八 あした八 ○下すたれ八
うし八 馬八 うしかひ八 雑色隨身八 ことねり八
猫八 蔵人の五位 蓮の露 六月の八講 朝顔のつゆ

三巻

木の花八 池八 節八 木八 鳥八 あてなるも
の ○まつしけなるもの ○ほいなきも 虫八 汗の香
にけなきもの 主殿司 遠江の浜 なたいめん けす女の名
若き人ちこ つかひ人 弓しもと よきいへの中門 笏のしろき
滝八 川八 橋八 里八 草八 集八

寺のたい八 草の花八 おほつかなきもの たとしへなき
もの 鳥のかた声 忍ひたる所 鐘の音鳥の声 下ゆく水の

四巻

ありかたきもの 内のつほね八 とみくさの花 一声の秋 あ
ちきなきもの いとほしけなきものゝ弁 こゝちよけなるもの
とりもてるものの弁 琵琶の聲 草のいほり 仲忠 あまのすみ
か ものゝあ八れしらせかほなるもの 中なるをとめ 雪山

五巻

めてたきもの なまめかしきもの かさすはかけ ○目もあや
なるもの 内裡八五せちのほと 無名といふ琵琶 いなかや
なかはかへしたる 御めのとの日向くたり ねたきもの 命婦か
ひかぬひ かつらいたきもの あさましきもの くちをし
きもの 賀茂のほとゝきす 海月のほね せんそく料 糸ぬたき

六巻

まんなの様もし 皇后淑景舎の御たいめん 早くおちにけり すこ
しはるある はるかなるもの 方弘 関八 森八 淀の
わたり 湯八

常よりもことにきこゆるもの ○めてたきものゝ人の名につきていふか
ひなくきこゆるもの 糸にかきておとるもの かきまさりするも
の 冬は夏八 あ八れなるもの 池あるところ はつせまつて
わひしけにみゆるもの あつけなるもの はつかしきもの

七巻

むとくなるもの 修法八 はしたなきもの 八幡の還御

らんもん みなくさ へいたん きぬの名のさた 月秋と期し
て 鳥のそらね八 このきミ しひ柴のそて つれくなるも
の つれくなくさむるもの とりところなきもの 下の
ころるかまへわろきもの やくかひ 一の橋のもと 八幡臨時祭の
名こり なそくあハセ 桃の木 双六 碁 おそろしきも
の きよしとみゆるもの きたなけなるもの

八巻

いやしけなるもの むねつふるもの うつくしきもの
人八えするもの 名おそろしきもの みる八ことなることなき
ものゝもしにかきてことくしきもの むつかしけなるもの く
もゝとほとき えせものゝ所うるをりの事 くるしけなるもの
うらやましきもの とくゆかしきもの ころもとなきもの
異 さたまりてにくきもの 太政官 人間四月 未三十の期に及ハす
左京 昔おほえてふようなるもの たのもしけなきもの 経
八 ちかくてとほきもの 遠くてちかきもの 井八 受
領八 やとりのつかさのごんのかミハ 大夫八 こひかき
女のひとりすむいへ 宮つかへひとのさと 雪のいとたかく八あらて
おきにかかるゝ

九巻

宮にはしめてまありたる頃 したりかほなるもの 風八 異 き
り八 ころにくきもの 鳥八 浜八 浦八 寺八
経八 文八 佛八 ものかたり八 野八 だらに
異 八 どきう八 法華経八 あそひ 男のあそひ八
女のおそひ八 舞八 ひきもの八 しらへ八 笛八
みるもの八 祭のかへさ 五月八かり山さとにありく 五日のさ
うふ よくたきしめたるたきもの 六月廿日八かりに 月のいとあ

かきに 大にてよきもの みしかくてありぬへきもの ひとの
いへにつきくしきもの たてふミのほそやかなる 革につちおほく
つきたる 行幸八めてたきもの 万のことよりもわひしけなる車に
みかさやま 青ざし 成信中将こそ 硯きたなけに あうよりの
まへ 文こそなほめてたきものなれ

十巻

うまや八 岡八 社八 ふるもの八 異 雪八 日八
月八 星八 くも八 さわかしきもの 異 心ゆるいなきも
の ないかしるなるもの 夜まさりするもの 異 ほかけおとりす
るもの 詞なめけなるもの 祭文 さかしきもの 異 見るか
ひなきもの 上達部八 君達八 殿上人八 法師八
女八 みやつかへところ八 みをかへたらん人なと八かくやあ
らんとみゆるもの ゆきたかうふりて ほそとのゝやり戸 たた
過に過たるもの ことに人にしられぬもの 五六月の夕かた か
もへ詣るみち 八月つこもり太秦まうて いみしくきたなきもの
異 ふところおとりしてわろくおほゆるもの せめておそろしきもの
たのもしきもの 鴟尾 人にくまれん事 人におも八れん八か
りめてたき八あらし 男こそなほいとありかたくあやしきこちしたる
もの八あれ なさけある事八男八さらなり女もこそめてたくおほゆれ
人のうへことさらたつ人 ひとのかほにとりわきてよしとみゆる
うれしきもの つるのよはひ 積善寺供養のはしめ

十一巻

積善寺供養の終 たふときもの 哥八 さしぬき八 か
りきぬ八 ひとへ八 わろきもの八 下かさね八 あふ
きのほね八 ひあふき八 異 ふゆの殿八 かはほり八 神
八 埼八 屋八 時そつする 成信中将八 名をさらにて

もたる人 つねに文おこする人の きらくしきもの 神なりの
陣 屏風八 かたゝかへして帰る 香炉峯 陰陽師のわら八へ
柳の眉 ところから 清水にこもりたるころ 御佛名

十二巻

家ひろくきよけにて 見ならひするもの うちとくましきもの
ぼんする こぶのうえ 業平か母のみや をかしとおもひし哥
よろしき男をけす女のほむる 声明王の眠をおとろかす いへやきた
る男 継母 すいせいきミ させもくさ とほくあふミのかミ
はしり井 女のう八き八 からきぬ八 裳八 かさみ八
おりもの八 もん八 薄やう八 硯のはこ八 ふて八
抄一本 貝八 墨八 くしのはこ八 かゝみ八 夏のしつら
ひ八冬のしつらひ八 まぎゑ八 火をけ八 たゝミは
弓長 弾正 病八 こゝろつきなきもの わひしくにくきひ
とに はつせ詣 いひにくきもの 工のものくふ 物語をもせ
よ ある所に中の君とかや 女房のまありまかてするに八 すき
くしくて独すみする人 ものゝけてうせさする家 ほづはうたふ
見くるしきもの 文字にかきてあるやうあらめところ得ぬものゝ
名 きゝにくきもの ものくらうなりて
以上

異本目録

普通本ニナキニハ ノ印ヲサス

春曙 夏夜 頃八 せち八 ふるもの八 風八 きり八
秋夕 冬朝 木の花八 花の木ならぬ八 くさの花八 はなゝきくさ八 鳥八
むし八 山八 峯八 野八 原八 岡八 もり八 里八
駅八 せき八 ミさゝき 渡 橋 海八 島八 浜八
浦八 河 淵八 たき八 いでゆ八 池八 井八 市八
家八 神八 仏八 経八 だらに八 ずほう八 寺八 文

八 集八 ものかたり八 と経八 だらに八 あそび八
法華経八 冬の殿八 かりきぬ八 さしぬき八 したかさね
八 そくたい八 女のう八き八 ひとへ八 おりもの八 か
らきぬ八 かさミ八 薄やう八 硯のはこ八 ふて八
すみ八 くしのはこ八 かゝミ八 夏のしつらひ八 冬の
しつらひ八 まぎゑ八 火をけ八 たゝミ八 ひらうけ八
あしる八 下すたれ八 馬八 牛八 ねこ八 ちことわ
かき人と八 牛かひ八 法師八 女八 女のおそひ八 男
のおそひ八 舞八 引もの八 しらへ八 ふきもの八 日八
月八くも八 雪八 冬八 夏八 つかさ八 殿上人八 す
らう八 権守八 やまひ八 女のミやつかへ所八 みもの八
正月一日云々 めてたきもの なまめかしきもの めもあやなる
もの うつくしきもの ねたきもの あさましきもの くちをし
きもの ゆく末はるかなるもの いひにくきもの いやしけなるもの
むねつふるもの ひとへするもの 名おそろしきもの み
る八ことなる事なきものゝ文字にかきてことゝしき八 むつかしきも
の えせものゝところうるをり くるしけなるもの うらやましき
もの とくゆかしきもの こゝろもとなきもの さたまりてにく
きもの 昔おほえてぶようなるもの とほくてちかきもの ちかくて
とほきもの たのもしきもの たのもしけなきもの こゝろにくき
もの きたなきもの ふとこゝろおとりしてわろくおほゆるもの
ないかしるなるもの よまさりするもの ほかけおとりするもの
さわかしきもの こゝろゆるいなぎもの つれゝなるもの
ものゝあ八れしりかほなるもの たゆまるゝもの 人にあなつらるゝ
もの すさましきもの にくきもの 心ときめきするもの みる
につけて過ぬるかたこひしきもの 心ゆくもの うれしきもの いひ
しらすいふかひなくとり所なきもの したのこゝろかまへわるきもの
みくるしきもの もしにかきてあるやうあらむに心えぬものゝ名

きくにくきもの 見るにおそろしけなるもの きよしとみゆるもの
 わひしけなるもの あつけなるもの つれくなくさむもの
 つねよりことにきこゆるもの めてたきものゝひとの名につきてい
 つかひなくきこゆるもの 糸にかきておとるもの 糸まさりするもの
 おなしことなれともきく耳ことなるもの ありかたきもの あちき
 なきものこちよけなるもの 大きにてよきもの みしかくてよきもの
 ひとのいへにつきしきもの さかしきもの みるかひなき
 もの あてなるもの まつしけなるもの ほいなきもの し
 たりかほなるもの おほつかなきもの たとしへなきもの みをか
 へたるとみゆるもの はつかしきもの むとくなるもの はしたな
 きもの あ八れなるもの にけなきもの こころつきなきもの 正
 月の一日八そらのけしきもつらゝかに云々 七日八ゆきまのわかな
 十日のほど 十五日八もちかゆのせて つこもりになりてちもくのほ
 と 三月三日八のとやかにてりたる 四月のころもかへ云々 万よ
 りもわひしけなる車 せち八五月五日にしく八なし 月のいとあかき
 に 五日のさうふ云々 六月廿日はかりいミしうあつきに云々 南
 ならず八東のひさしの云々 七月十よ日八かりの云々 まつたかき東
 南などの云々

頭注

*1

美考、すへて中昔の女のかけるかゝる草子のたくひ、蜻蛉日記など、もとより作者の名つけたる類もなきに八あらねど、大かた八今いはれたることく、たゞそれをもてはやすひとの心々に、其名いへりしものなる事論なし。但し此草子をはやくより人々いみじきものにしてとりはやしむるさま八、此記中にところくにいへるおもふきにてもしられ、栄花物語根合卷_{下四十二}に、女房車のりこほれて云々、もとよりある車とおしけちて、たちならひこらんずる清少納言がいひたるやうにめてたしとみゆなとあるにても、しらるゝをしかもてはやすに

つけて八、此草子をもてあそふ人々の心々に、清少納言枕草紙とも、清少納言記とも、又たゞ清少納言なともいひけん。次いひける明月記の文、清少納言トアルハタ、此記ヲサシテイヘルヤウ也。かゝれ八今もそ八心しなるへけれ八、清少納言とのみいはんもあなかちにわるかるへきにもあらねど、そ八うちとけ言にこそさいはめ。正しく此草子のはしめにうる八しく標題をかゝんに、さ八あらん八あまりしとけなし。源氏物語を源氏とのミいへることも、いと古き家集などにもみえたれと、さりとして今源氏物語の標題を源氏とのミかきてよからんや八、又群書類従に八清少納言枕草子とかゝれたる。これ八いとる八しくて難なけれとも、あまり詞長くてつらはしけれ八、今清少納言記とかゝれたる八けによくおもひはから八れたり。

*2

美隆考、中昔枕草トイフニ二義アリ。一ツ八久かたの天、足引の山などの類の発語をいふ。其八ものゝ頭方におく由にて山、天などいはんとて、まつ足引、久方なといふ辞を頭におくよし也。清輔の奥儀抄にひかれたる新撰髓脳に、古き人おほく哥枕をおきてすゑにおもふ心をあら八すトアル。哥枕の枕にいはいひもて行八右の発語を枕詞といふと同趣也。又永長二年東塔東谷哥合の判詞二、哥の初五文字のことを枕もじといへるもおなし意也。され八彼教長卿の古今序のそれまくら詞云々トアルヲ、源氏ナトノ枕言トヒトツニ常語也トトキナサレタル八、彼卿の一説ニテ打マカセラクコトニハアラジ。かゝれ八枕詞、枕文字などの枕八頭方におく由にて枕何といふ也。又此枕冊子なといふ枕八、常にたよりよくとりつかふものにいふへきニていふ名にて、雅亮装束抄御帳の様をいへる条に_{上略}、其枕の左右に八文字にしたんちの手の小木丁をたつ、枕木丁といふ也トアル枕コレ也。コレトリアツカフニ便ヨク小サク作りテ枕辺ニオク故ニ枕木丁といふ也。今の俗に小サク作りテ手カヤリ進退スル蚊屋ヲ、マクラ蚊屋トイフモ此心八へ也。又枕篋といふも新猿楽記に三郎主者細工井木道者也。手篋、硯箱、枕篋、櫛篋…之上手也トアル如ク、其枕ヲ入ル、篋ナルコトハ勿論

ナガラカタヘニオキテ物入ル、ニ便ヨキ物ユヘニ、枕ナラテモ物入レシ料と常ニトリナラシ、モノト見えテ枕筥ニ文書ヲ入タルコト袋草子ニ見エ、又後拾遺雜わすれしといひ侍けるひとのかれくになりて枕筥とりにおこせて侍けるに、馬内侍、たまくしけみハよそになりぬともふたりちぎりしことなわすれそ、トアルコトカキノ枕筥ヲ彼内侍集ニハ手はコトカケリ。カク常ニカタヘニオキテタヨリヨクトリアツカフ物ニ、枕何トイフコトノ多キ故常ニ何クレノコト書記サンニタヨリヨカルヘク造リテカタハラハナタヌ草子ヲモ枕冊子トイフ也ケリ。カク平生ノコトクサヲ枕言ト源氏ニイヘルナトモ、コレト同意ニオツメリ。カ、レハ此枕冊子ノ枕ヲ枕詞、枕文字ナトノ枕ト一ツニ心得むハわるかるへし。源氏玉葛によるつのさうし、哥枕よくあないし、くミことある哥枕八上にいへる発語のことを哥枕といへると八別にて、哥よまんにたよりよき詞ともあつめたる草子をいふなるへし。能因哥枕なといふも哥詞をひろくあつめて註したる書なるをもて知へし。哥枕といふを名所のこと々のみ心得八あらず、名所も哥枕の中の一種にて八あれと、これにかぎりたゞ考に八あらず。

★ 3

美按、古くより清少納言記とてものではやしゝハ、此宸翰本のやうなるに八あらて、通本のかたなるへき事ハ春曙抄にもいはれたることく、禁秘抄などにひきたまへる詞にてもしられ、又明月記貞永二年三月廿日ノ条上略典侍往年幼少之時令參故齋院之時、所賜之月次二卷所持也今度進入宮詞同彼御筆也。中略件絵被書十二人之哥被宛正月被行二月清少納言梅壺之所三月天厩藤壺四月実方朝臣奉使五月神館哥

紫式部日記
晴鏡氣 下略

★ 4

美按、江戸人堤朝風といふ人の著ハせる近代名家著述目録といふ書に、加藤槃齋といふ人の著述目録の中に枕草紙抄十五トアリ。十五巻抄ハこれなるへき歟。